

論文の内容の要旨

論文題目 セデック語 (台湾) の文法
氏名 月田 尚美

本研究は、台湾で話されているセデック語 (タロコ方言) の記述文法である。セデック語 (タロコ方言) は、台湾花蓮県を中心に居住する太魯閣 (タロコ) 族の言語である。太魯閣族の人口は約 2 万 4 千人である。しかしその全員がセデック語を話せる訳ではない。系統的にはオーストロネシア語族に属する。フィリピンのタガログ語などに近い。

第 1 章ではセデック語の概略と文化的背景を述べた。言語のタイプ、系統について、歴史、自称、内部の方言、外部の他の言語との接触、言語の現状などについて述べた。セデック語の危機的な状況にも触れた。若い世代は家庭でセデック語を習得しなくなっている。その他、セデックの人々の伝説や言い伝え、伝統的な、及び現代の、生活と文化について述べた。この章の最後で先行研究について紹介した。

第 2 章では音韻を記述した。子音は p, b, t, d, k, q, ' , m, n, N, s, x, h, g, c, l, r, w, y の 19 個、母音は a, i, u, e の 4 個である。g は有声軟口蓋摩擦音、l は有声歯茎側面摩擦音である。また語構成において、母音の分布が特徴的である。この言語ではアクセント (高く発音される) が次末音節に現れる。a, i, u は主に語末音節と次末音節、つまりアクセント以降に現れる。e は逆に語末音節には現れず、次末音節と次々末音節、それ以前にしか現れない。この言語にはいくらかの子音連続がある。子音連続の制限を sonority (響き)

による言語音の階層を考慮しながら記述した。また、2.6で、生成音韻論の枠組みを利用して形態音韻規則を記述した。

第3章ではセデック語の品詞分類を行った。セデック語の品詞として、名詞、動詞、間投詞、数詞、人称代名詞、指示詞、前置詞、副詞、接続詞、語気詞を設定した。この言語では「動詞」と「名詞」の区別をするのが、機能的な面からは難しいことを示した(3.12.1)。所謂「形容詞」はこの言語では動詞に含める。このことについても述べた(3.12.2)。

第4章は、セデック語の動詞の態と名詞の格の体系の概略を述べた。まず、4.1で全体の概略を述べた後、4.2で名詞の格の体系について述べた。セデック語の名詞の格には、直格、斜格、主格、属格がある。ただし代名詞以外では属格は直格と同形である。また、斜格も代名詞および有生性の高い名詞句以外では直格と同形である。代名詞には独立代名詞と接語代名詞がある。独立代名詞では直格、斜格、主格が、接語代名詞には主格と属格が区別される。夫々の格の形、機能について述べた。4.3で、セデック語の態の体系を記述した。フィリピン諸語には「焦点体系」と呼ばれる態の体系がある。焦点体系では、態を変えることで動詞の様々な意味役割を持つ項が主語になりうる。セデック語の態の体系もこれの一種と言える。セデック語には **Agent Voice**, **Goal Voice**, **Conveyance Voice** の3つの態がある。フィリピン諸語の「焦点体系」の研究は、台湾原住民諸語よりも研究が進んでいて、どの名詞句が主語か、**Agent Voice** にあたる文を能動文、**Goal Voice** にあたる文を受動文とすべきか、**Agent Voice** にあたる文を反受動文、**Goal Voice** にあたる文を普通の能動文とすべきか、という論争がある。これを紹介し、セデック語に関する筆者の意見を述べた。筆者の意見では、セデック語では主格の名詞句が主語である。また、**Agent Voice** の文も **Goal Voice** の文も同じように基本的な文である。ただし、現象としては対格的な現象が見られることが多い。またここでは、セデック語では、動詞句が体言相当語句として、また連体節として、音形を変えることなしに機能することを紹介した。これと同等な現象はフィリピン諸語にもあり、先行研究もある。そのような先行研究を紹介し、セデック語の現象について筆者の意見を述べた。筆者は、セデック語では動詞句が動詞のまま述語としても、体言相当語句としても、連体節として現れることが出来る则认为。ただしいくつか固定した表現もあり、そのような表現ではある程度名詞化していることを示した。

第5章では、セデック語の名詞(5.1)、動詞(5.2)、数詞(5.3)の形態について述べた。派生についても述べた(5.4)。4.2で名詞の格について既に述べたので、5.1では名詞の、格以外のカテゴリーについて述べた。格以外に、所有形、複数形、過去形、未来形、呼びかけ形がある。名詞に過去形、未来形という時制による形態変化があるのは類型論的に珍しい。5.2では、動詞の活用を詳述し

た。セデック語の動詞は、先に述べた 3 つの態で、時制・相・法に関する活用をする。具体的には中立形、完了形、未来形、不定形、意志形がある。他に同時形もある。これらの形態と表す意味を詳しく述べた。5.3 で数詞とそれからの派生を見た。5.4 では、動詞の派生と名詞の派生を見た。動詞の派生は活発である。

第 6 章と第 7 章ではセデック語の統語を扱った。第 6 章で単文を扱い、第 7 章でより複雑な構造を扱った。まず、6.1 では、複文を含めて、文の種類について述べた。6.2 では名詞句の構造について、6.3 では単文の構造について述べた。文の要素として、述語、主語、副詞表現、語気表現、接続表現、節頭名詞句を設定し、それぞれについて述べた。ただし、副詞表現は、6.7 で扱うのでここでは触れなかった。節の外側に現れるもの（付け加えの語、独立語）もここで扱った。6.4 ではセデック語の 3 つの態で、どの意味役割を持つ項が主語になるのか、又、なれないのか、を示した。これは動詞によって多少異なり、これによって動詞を分類できることを示した。この言語では 3 項動詞の項の振る舞いに関して、Dryer (1986)の言う、Primary object/secondary object の区別に似たものがあることを示した。6.5 では、主語になっていない項の現れ方（主に語順）を扱った。6.6 では動詞句の拡張について述べた。いろいろな副詞や前置詞、指示詞で動詞句を拡張することができ、アスペクト、時制、などの意味やいろいろな副詞的な意味を付け加えることが出来る。6.7 では副詞表現を扱った。夫々の副詞の意味、節中で現れる位置、現れる節の種類、制限等について述べた。6.8 では疑問文を扱った。一般疑問文、特殊疑問文、その答え方、疑問のメンバーの疑問文以外での使い方について述べた。6.9 では命令文、誘い掛け文、申し出文を扱った。述語の形、項の現れ方、語気詞の現れ方等について述べた。6.10 では所在文、存在文、所有文を扱った。これらの文の項の現れ方、省略に関する制限、有生性、定性等に関する特徴について述べた。存在文・所有文では、場合によって、存在する主体と場所・所有者との間に分離不可能の関係がある。また、この言語には「被所有物降格」と呼べそうな現象があり、これに所有傾斜 (Tsunoda, 1995) と動作の対象が受ける *affectedness* の程度が関係していそうなことを示した。6.11 では程度に関する表現を扱った。セデック語では動詞から派生する「～さ、～な様子」（「長さ」、「太った様子」等）を表す表現を用いて、「A は B より～だ」、「A は B と同じくらい～だ」、「なんて～なんだろう」等の意味を表す。6.12 では受益、授益に関する表現をまとめた。ha(ya) という小辞を用いた構文があることを紹介した。この構文は「(誰かのために) ～する」を表す。この構文で興味深いのは主語でないものが普通は主語示す代名詞主格接語形で示される点である。'asaw 「～のせい」、nawxay 「～のおかげで」という前置詞を使った表現についても述べた。6.13 では、使役、相互、再帰という

派生的な態を扱った。夫々について、派生動詞の形態、文の統語（項の現れる形、態の制限等）、表す意味範囲を述べた。

第7章はより複雑な構造を扱った。7.1 でまず概説を述べ、7.2 では不定詞構文を、7.3 では動詞連続を、7.4 では動詞句の等位接続と動詞の等位接続を扱った。不定詞構文、動詞連続、動詞句の等位接続、動詞の等位接続は、連続したものである。7.5 では動詞句を扱った。動詞句は、主語を含まない。しかし、主語を含まなくても、動作者を表す項と動作の対象を表す項を含むことは、例えば **Conveyance Voice** 形では普通にありえる。そのような動詞句はまるで節のように見える。7.5.2 でこの **Conveyance Voice** 未来形を含む動詞句の不定未来用法を扱った。「～するように(…する)」等を表すのにセデック語では **Conveyance Voice** 未来形を含む動詞句を用いる。7.6 では、名詞節、時間節、内的関係節という埋め込み節3種類を扱った。最後に7.7 では緩く繋がった節を扱った。緩く繋がる節には'u/ga 接続、de'u/degā 接続、ni 接続、deni 接続、並列がある。'u/ga 接続と de'u/degā 接続は **subordination**, ni 接続と deni 接続は **coordination** を表すといえる。夫々の接続が場合によっていろいろな意味関係を表しうる。また、特定の接続詞や副詞と組み合わせると表す意味を限定することができる。いろいろな意味関係があることを例を挙げて示した。'u/ga 接続は **adjoined relative clause** として機能することがある。その際の主語が一致しなければならないという制限についても述べた。